

<総括>

出題数 現代文 1題・古文 1題・漢文 1題

試験時間 120分

例年の評論ではなく隨筆が出題された。

抜き出しの問題が出なかった。

<本文分析>

大問番号	第一問 現代文
出 典 (作者)	『大学の教室で』(島田 潤一郎)
頻出度合 ・的中等	なし
分 量 前年比較	大幅 分量 (減少・やや減少・変化なし・やや増加・ 増加) 約 5380 字 (2024 年 約 2190 字)
難 易 前年比較	難易 (易化・やや易化・ 変化なし ・やや難化・難化)

<大問分析>

大問	ジャンル	設問	設問形式	難易度	コメント (設問内容・答案作成上のポイントなど)
一	隨筆	問一 問二 問三 問四 問五 問六 問七 問八	記述 論述 論述 論述 論述 論述 論述 論述	標準 標準 標準 標準 標準 標準 やや難 難	漢字書き取り。従来通り 5 問。 「そういうもの」という指示内容を答える問題。 「その指摘」の内容をおさえつつ答える問題。 前述の文脈をおさえて答える。 前述の文脈をおさえて答える。 設問の意味が分かりにくい。 前述の文脈を踏まえて解釈して書く問題。 4 つの指定された語句を用いて本文全体を踏まえて説明する問題。150 字の指定があった。

※難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

- 評論ばかりでなく隨筆も読み慣れておこう。
- 漢字は必ず出るので日頃から対策しておくこと。
- 150 字程度の論述の練習をしておくこと。

<総括>

出題数 現代文1題・古文1題・漢文1題 試験時間 120分

平安時代の作り物語『堤中納言物語』からの出題であった。本文は読み取りにくいところもあったが、設問は答えやすいものが多かった。

短語句の現代語訳がなく、文学史が復活していた。また、昨年に続き、和歌の現代語訳が出題された。

<本文分析>

大問番号	第二問 古文
出典 (作者)	『堤中納言物語』
頻出度合 ・的中等	頻出・的中なし
分量 前年比較	分量(減少・やや減少・変化なし・やや増加・増加) 約1200字
難易 前年比較	難易(易化・やや易化・変化なし・やや難化・難化)

<大問分析>

大問	ジャンル	設問	設問形式	難易度	コメント(設問内容・答案作成上のポイントなど)
二	古文	問一 問二 問三 1 2 3 問四 問五 問六 問七 問八	記述 記述 記述 客観 客観 記述 記述 記述 記述 記述 客観	易 標準 やや易 やや易 標準 標準 標準 標準 易 標準 易	文法(五箇所) 現代語訳(五箇所) 人物判定 人物判定 和歌の現代語訳 理由説明 理由説明 空欄補充 理由説明(50字) 文学史問題

※難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

基本的な文法力、単語力を身につけて、正確な読解力を養い、字数制限のある記述問題に対応できる力をつけておこう。

さまざまなジャンルの作品に対応できるようにしよう。

和歌の対策も必要である。

<総括>

出題数 現代文 1題・古文 1題・漢文 1題 試験時間 120 分

頻出出典『説苑』卷七「愚公之谷」の逸話からの出題。
2009年ノートルダム清心女子大学・2014年愛知県立大学に既出。

<本文分析>

大問番号	第三問 漢文
出 典 (作者)	『説苑』(前漢・劉向)
頻出度合 ・的中等	頻出
分 量 前年比較	分量(減少・やや減少・変化なし・ やや増加 ・増加) 228字 (2024年 209字)
難 易 前年比較	難易(易化・やや易化・変化なし・ やや難化 ・難化)

<大問分析>

大問	ジャンル	設問	設問形式	難易度	コメント(設問内容・答案作成上のポイントなど)
三	漢文	問一 問二 問三 問四 問五 問六 問七 問八	記述 記述 客観 記述 記述 記述 客観 記述	易 標準 易 標準 標準 標準 難 難	単語の読み。「夫」「若」「耳」「猶」「況」。 「今視公之儀状、非愚人也。何為以公名之」を現代日本語訳する。後半の疑問がポイント。 「傍隣」はなぜ「臣」を「愚」としたのか。 管仲が自分を「過」と言う理由。 「安有取人之駒者乎」を書き下し文に改める問題。 誰が、誰に、何を与えないのか、抜き出す問題。 「有以智為愚者」とはどういうことか。 本文全体から「智」は桓公・管仲のことであるのに注意すること。 孔子は弟子にどのようなことを覚えておくべきだと言っているのか。問七と連動する。

※難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

- ・重要単語や基本句形をマスターすること。
- ・漢詩を含めて、様々なジャンルの漢文に慣れ親しんでおくこと。
- ・内容説明、理由説明、心情説明など記述対策を十分に積むこと。
- ・書き下し文にしたり、訓点を付けたりする演習を積むこと。